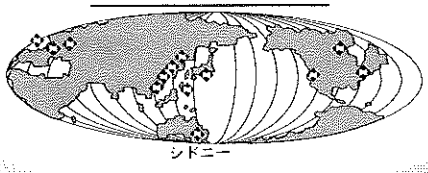
【Ⅲ】
海外だより



伸びゆくオーストラリアのワイン産業

NLI・インターナショナル・オーストラリア　高野　誠

はじめに

週末の夜、シドニーの繁華街のレストランを覗いてみると家族、友達、恋人同士が会話に花を咲かせつつ夕食を楽しんでいる光景が目に入る。テーブルには必ずといっていいほどワインのボトルが置かれている。イタリア、フランス料理に限らず日本、中国、タイ、インド……料理の種類を問わず、ワインを飲んでいるのだ。オーストラリアにはB.Y.Oと入口に書かれているレストランをよく目にする。B.Y.Oとは"Bring Your Own"の略で、「お酒はご自分でお持ち込み下さい」の意である。酒屋で安くワインを購入したり、自宅のワインコレクションから持ち出してきたり、各自がそれぞれワインを持ち寄って食事を楽しむ。生活大国オーストラリアの魅力的な一面である。ここでは、オーストラリアの食生活からは切っても切れない存在であるワインについて、その歴史、現状、および今後の展望について述べてみたい。

ワインと言えばフランスかイタリアを思い浮かべる人が大半で、オーストラリアがワインの産地であることは余程のワイン通でなければ知る人はほとんどいないであろう。確かに、フランス、イタリア等のワイン大国と比較するとオーストラリアのワインは生産量において決してメジャーとは言えない。1994年の統計で見るとオーストラリアのワイン生産量はイタリアの59.3億リットル、フランスの54.6億リットルに対して5.9億リットルに留まっており、世界の総生産に占めるシェアは僅か約2％である（表1参照）。しかし、1788年当時移民によって初めてシドニー市内にブドウの木が植えられてから約200年余りの間にオーストラリアのワイン業界は目ざましい発展を遂げ、今日に至っては量でこそ世界の中でのウェイトは低いものの質においては世界を代表する知名度を得ている。特に過去30年間におけるワイン業界の伸びは目ざましく、生産量においては1966年の1.5億リットルから1994年には5.9億リットルと約4倍近くに膨れ上がっており、質において

表1　主要国のワイン生産、輸出

（百万リットル、％）

	生産量(世界シェア)	輸出(世界シェア)
イタリア	6,229.5 (24.0)	1,246.6 (26.3)
フランス	5,328.5 (20.6)	1,050.2 (22.2)
スペイン	2,549.0 (9.8)	974.3 (20.6)
北アメリカ	1,660.0 (6.4)	115.4 (2.4)
アルゼンチン	1,447.0 (5.6)	33.0 (0.7)
ドイツ	971.8 (3.7)	74.7 (5.8)
南アフリカ	916.2 (3.5)	5.0 (0.5)
ロシア	750.0 (2.9)	— (—)
ルーマニア	583.9 (2.3)	16.0 (0.3)
オーストラリア	461.8 (1.8)	102.9 (2.2)
世界合計	25,926.9 (100.0)	4,734.8 (100.0)

（出所）国際ワイン協会
（注）数値は'93年時点の統計

もワインの種類を代表するシャードネー（コクのある辛口白ワイン、フランスのバーガンディーに相当）とキャベルネ・サーヴィニョン（柔らかい口当たりの赤ワイン、フランスのボルドーに相当）についてはフランスワインに続いて世界で2番目に位置づけられるほど洗練されたものが生産されている。この事はイギリス、アメリカで出版されている主要なワイン専門誌等にも記載されている。オーストラリアワイン協会（Australian Wine Foundation）は今後の展望として2025年迄にワインの売上高を年間45億豪ドル（約4050億円／1995年11億豪ドル）、輸出高を25億豪ドル（1995年／5.51億豪ドル）まで伸ばしフランス、イタリアと肩を並べる存在となることを目標に掲げている。

オーストラリアワインの歴史

そもそもワインはいつごろから存在するのか。それは紀元前5000年にも遡り、考古学研究によるとワイン造りの発祥はイラン西部の山脈地帯で、紀元前3000年にはエジプトとフェニキアに、紀元前2000年にはギリシャ、紀元前1000年にはイタリアおよび北アフリカへ伝わっていったとの記録が残っている。フランスへは紀元前600年頃ギリシャ人により伝えられ、その後ワイン造りはその他の世界各地に徐々に拡がっていった。オーストラリアには1788年ボタニー湾植民地の初代総督に任命されたイギリスの退役海軍将校キャプテン・アーサー・フィリップにより初めてワイン造りが導入され、当初は入植者であるイギリスの貴族階級が現在インターコンチネンタルホテルが建っているシドニー市内の中心地一帯にブドウ畑を造り始めた。ところが海風を受けるシドニー市内は湿気があり、また比較的夏の雨も多くブドウの木には適さない土地であることが判り、ブドウ畑造りはシドニー市内からパラマッタ、ペンリス、カムデンと徐々に内陸部の方へ移されて行った。1825年にはオーストラリアで初めてのブドウ園がシドニー市内から車で北に約2時間のハンターバレー（ニューサウスウェールズ州）に造られた。その後、1860年代ゴールドラッシュ時以降、ヨーロッパからの移民による洗練されたワインを造るために必要な技術が導入され、オーストラリアワインの発展に大きく貢献することとなった。

1960年代以降のワイン業界の発展は著しく、30年間でワインの生産量は約3倍に膨れ上がった。1960年代は赤ワイン中心に発展したが、1970年代にはワインクーラー等のワイン保存施設、ワイン生産に必要な濾過、ブドウ圧縮機等の道具が発達したことにより白ワイン生産の伸びが急拡大した。こうした結果1966年当時、一人当たりのワイン消費量は年間僅か2本であったが現在は24本までに増加している。200余年前にオーストラリアに入植してきたヨーロッパからの移民により持ち込まれたワインは今や生活大国オーストラリアの食生活に密着した存在となっている。

オーストラリアワインの国内消費量と急成長の背景

何故、歴史の浅いこの国でワイン業界がここまで急成長を遂げたのか、ここでは国内消費の伸び、及びその背景について探ってみる。

まず最初に挙げるべき点は、オーストラリアはワイン造りにおいて最も重要な土台となる土壌、気候に大変恵まれていることであろう。ブドウの木にとって最も適した温度は15度から25度であると言われている。オーストラリアの年間を通して温暖で乾燥した気候は高品質なブドウを育てることを可能とし、その点ヨーロッパに引けをとらない条件を兼ね備えていると言えよう。

オーストラリアワインの国内消費は1960年からの30年間で急激な伸びを見せた。1965年の0.7億リットルから1994年には3.3億リットルまで

増加しており、また一人当たりでは年間5.6リットルから18.5リットルまで増加している。この期間のワイン消費の伸びを支えた要因として挙げられるのは、カスクワイン（樽、箱入り）が登場したことである。特に1978年0.3億リットルであったカスクワインの売上は1986年には1.6億リットルまで急増している。カスクワインは量の割に割安な価格で購入できることから1990年代前半も景気不況の中、カスクワインの伸びが続いた。1994年のカスクワインの売上はワイン売上全体の50％を占めた。一方で高品質なブドウから造られるボトル入り（750ml）のプレミアムワイン(注)の売上も1980年代半ばあたりから顕著に伸びはじめ、1995年以降はカスクワインの伸びが減速する一方、売上高で見ると比較的に高い価格が設定されているプレミアムワインが、全体の70％を占めている。今後は量よりも質を求める傾向にあることから、プレミアムワインの売上に支えられる形で国内消費は伸びていくであろう。

また、1960年以降のワインの生産、消費の増大には次のような社会環境の変化があったことも見逃せない。

－大恐慌以降の経済不況からの脱出により車の普及が進むと同時に余暇の過ごし方が多様化し、ブドウ園を訪れてワインテイスティングを楽しむ人々の数が徐々に増えていき、また、この時期にワインに関する専門誌も出版され始めるなど人々の日常生活に“ワインを楽しむ”ゆとりが生まれてきた。

－1950、1960年代にヨーロッパからの移民が急増し、国全体の人口に占めるイギリス以外のヨーロッパ大陸生まれの人の比率は1947年の1.1％から1971年には7.1％まで増えた。その結果、必然的にワインを日常的に楽しむ人々の数も増えていった。

－ワイン生産過程に必要な温度調節機、濾過等の道具が技術的に発達し、低コストで良質のワイン生産が可能となり、また、カスクワインの登場により一般家庭での保存が容易となった。

オーストラリアワインの輸出状況

国内での消費量が急激に伸び、国際的知名度を得たオーストラリアワインは当然、海外のマーケットにおいても拡張を続けている。オーストラリアワインの輸出は1980年代半ばから急速に伸び始め、1984年の輸出量は900万リットルであったのに対し1996年には1.5億リットルを超え、輸出額では過去最高の5.5億豪ドルを記録した。毎年、300万本のワインが輸出されワイン業界が輸出から得た収入は対前年35％以上の伸びを見せた。

1980年代半ばからのワイン輸出の急増は大きく2回の時期に分けられる。1回目は1985～1987年にかけてで、この時期にシャードネー、リースリング、キャベルネ・サーヴィニョン等、多種の高品質なブドウが大量に栽培されプレミアムワインの生産が著しく増加した。その後2年間は逆にブドウの不足に伴う価格上昇により、輸出の増加は若干減速した。2回目は1990年以降、1980年代後半の不景気に伴い国内の需要が落ち込んだのを契機に、ワイン業者が輸出を積極的に押し進めたこと、また過去2年間に上昇したブドウ価格にあわせてブドウが大量に栽培されたことにより、輸出は再び軌道に乗り増加していくことになった。この様に、オーストラリアワインの輸出は急速に伸びてはいるものの、世界的水準からするとその存在はまだ小さい。世界のワイン輸出の大半を占めているのはやはりイタリアとフランスで1994年の輸出マーケットでは統計で見るとイタリアが

(注)一般的に高品質なブドウから造られる比較的高級な1リットル以下のボトルワインをプレミアムワイン、箱やその他の容器で売られており若干質が劣るものをノンプレミアムワインと呼んでいる。

111億リットル、フランスが165.8億リットルで両国が全体の約60％を占めている。

次にオーストラリアワインの主な輸出相手国を見てみる。1990年代よりイギリス向け輸出量の増加が著しく、1995年においてはオーストラリアからのワイン輸出量全体の約48％を占めている（表2）。イギリス系を中心とした白人が総人口の90％を占めているオーストラリアはイギリス人によって発見され、1868年迄イギリス植民地であったという歴史的背景があり、経済的、文化的な面での繋がりが依然強く保たれていることも要因として考えられよう。1996年においてはイギリス向け輸出高は対前年30％増加して2.5億豪ドルを記録した。北アメリカ、ニュージーランド、カナダ、スウェーデンがイギリスに続いており、上位5か国でオーストラリアからの輸出全体の80％を占めている。イギリスは輸入依存型であることに加えワインの消費量が顕著に伸びていることから、今後もオーストラリアは重要輸出先ターゲットとしており、今後2025年迄に輸出量を1.2億リットル（1995年／0.6億リットル）にすることを目標にしている。また、イギリスの他に北アメリカの市場も今後の輸出先ターゲットとして重要視している。北アメリカは世界で3番目のワイン輸入市場であり、ここ数年のワイン消費量は目ざましく伸びているものの現在のところオーストラリアからのワイン輸出量全体の15％を占めているに過ぎない。業界では今後、北アメリカ向けワインの輸出量を2025年迄に0.88億リットル（1995年／0.15億リットル）まで増やすことを目標にしている。

表2　オーストラリアのワイン輸出先

（千リットル、％）

	'93－'94	'94－'95	'95－'96
イギリス	48,273	51,404	61,447
北アメリカ	11,548	13,153	15,864
ニュージーランド	23,357	15,574	12,742
カナダ	6,915	5,615	5,979
スウェーデン	15,283	7,369	5,728
アイルランド	2,059	2,414	3,397
ドイツ	1,241	1,874	3,331
日　本	2,570	2,311	2,448
スイス	731	957	1,460
タ　イ	499	643	1,175
シンガポール	794	959	1,147
ホンコン	925	1,054	1,068
合　計	125,541	113,824	128,411

（出所）オーストラリア統計局

さて、わが日本のアルコール事情については最近、ストアや酒屋にもインポートワインが置いてあるのをよく見かけるが、まだワインが日本人の生活に浸透しきっているとはとても言えない。現在のところ小規模なマーケットではあるが日本のワインの消費量は世界で4番目の速さで伸びており、消費量の約60％が輸入ワインで占められている。1993年の統計によると日本の輸入ワインに占めるオーストラリアワインは僅か3％に過ぎないが2025年迄には7％まで引き上げ、輸出量を0.5億リットル（1995年／200万リットル）まで増やすことをオーストラリアワイン業界は目標にしている。

ワイン業界と経済

オーストラリアでは全ての州でワインが醸造されており、また毎年多くの観光客を集めるほどのブドウ園も全州に存在する（表3参照）。当然地域によってマーケットの規模、地域経済への影響も異なってくる。オーストラリア統計局（ABS）の調査によるとオーストラリアワイン総生産量の約80％は南オーストラリア州（51％）及びニューサウスウェールズ州（29％）からの生産である。特に、1993年における南オーストラリア州からの輸出品全体の約7％はワインで占められており、南オーストラリア州はワイン生産量、またワイン業界の労働人口においても他州に比して群を抜いており、政府の雇用促進計画にとっても重要な業

界であると見做されている。南オーストラリア州以外でもワイン市場の規模の大小に係わらず、ワイン業界が少なからず各地域の経済に貢献していることは確かである。

表3　主なオーストラリアのブドウ園

ニューサウスウェールズ州
ハンターバレー、ヒルトップス、マッジー、マランピジー、イリゲーション
ヴィクトリア州
マレーリバー、ヤラバレー、マセドン、ピレニース、ギーロング、(その他8か所)
南オーストラリア州
バロッサバレー、クーナワラ、クレアバレー、アデレードヒルズ、(その他5か所)
西オーストラリア州
マーガレットリバー、スワンバレー、ロウワーグレートサザンエリア、(その他2か所)
クイーンズランド州
グラナイトベルト
タスマニア州
パイパーズブルック、タマールバレー、ダーウェント

ワイン業界に関連する雇用はブドウ園、ワイン醸造所等、業界に直接関係するものとブドウ園を有する地域のホテル、レストラン等、観光業界に分けられる。ワイン醸造所でワイン醸造に携わる雇用者数を見てみると1993年6月末現在、全国で約5,600人が雇用されている。各州の内訳は南オーストラリア州が51％、ヴィクトリア州21％、ニューサウスウェールズ州18％、西オーストラリア州10％で構成されている。また、ブドウ園でブドウの栽培に携わる雇用者数は全国で約4,500人となっている。6月末は季節的にワイン製造に携わる労働人口が少ない時期であるが、ブドウ園、ワイン醸造所が最も活性化する夏場（1～3月）のブドウの刈り入れ時期にはパートタイム人口が急増する。例えば、南オーストラリア州のクナワラは常時520人の完成雇用を擁しているが刈り入れ時期には1500人のパートタイムが必要となり、またニューサウスウェールズ州のハンターバレーは完全雇用が850人、刈り入れ時期にはパートタイムが1200人増加する。このように、各地域におけるワイン業界は安定的な雇用を創出しており失業率改善の大きな要因となっている。国の失業率が8.5％を超え、OECD内で高い水準にある中、労働市場の改善が国の抱える大きな課題となっている連邦政府はワイン業界の雇用促進のためブドウ栽培、ワイン醸造に必要な技術習得に向けたトレーニングプログラムへの補助金を支給している。

次にワイン業界と間接的な繋がりを持つ観光業界について触れてみる。オーストラリアの長閑で広大なブドウ園に点在するワイン醸造所を訪れると、無料でワインテイスティングを楽しみながら気に入ったワインを割安な値段で購入できる。オーストラリアではこのようなワインテイスティングが一般的であり、ブドウ園、ワイン醸造所の存在が地域の観光地としての魅力を引き出し、ワインテイスティングを目的にブドウ園を訪れる国内、海外からの観光客の数は年々増加傾向にある。西オーストラリア州を例に挙げると、州内で最も多くの観光客が訪れるのが西オーストラリア州を代表するブドウ園マーガレットリバーで、1993年の統計によると年間に15万8000人の観光客が当地を訪れている。また、ニューサウスウェールズ州のブドウ園ハンターバレーには毎年50万人以上の観光客が訪れており、観光客からの収入は年間約1.23億豪ドル（約110億円）にもなる。

また、一層の成長が期待できるワインの輸出がオーストラリアの抱える経済課題の一つである経常赤字の縮小に少なからず役立つことも忘れてはならない。鉄鉱等の資源国であるオーストラリアは、資源の輸出に支えられている部分が大きく海外の経済動向に左右されやすい傾向にある。オーストラリア国内で製造、加工され高付加価値輸出品の一つであるワインは今後のオーストラリア経済にとって益々重要な産業となるであろう。

2025年に向けた展望

1996年7月、オーストラリアワイン協会は2025年迄の約30年間で年間のワイン生産高を45億豪ドル（1995／11億豪ドル）、輸出高を25億豪ドル（1995／5.51億豪ドル）まで伸ばすことを目標に掲げた。ワイン大国イタリア、フランスに勝とも劣らない程の国際的な知名度を目指すわけである。目標を達成するためには、ブドウの生産量を現在の85万トンから約2倍の165万トンまで引き上げる必要があるが、当然現伏のワイン業界の規模のままでは目標を達成することは不可能である。長い道程ではあるが、オーストラリアのワイン業界は2025年に向けて以下に挙げる数々の課題への取り組みを開始している。

- ブドウ畑面積
  現状のブドウ畑面積に加え、2022年までに4万ヘクタールの新しいブドウ畑を造る必要がある。このため12億豪ドル（約1080億円）の予算が必要だと見積もられている。
- 醸造技術
  ブドウ栽培の量が急増することに対応してぶどう圧縮機、濾過等のワイン醸造技術の改善が求められ、またワインの保管については今の2倍の容量が必要となる。
- 水
  ワイン醸造に欠かせないのが水である。ブドウ畑の拡大、ワイン醸造の増加に伴い2025年迄に約700億リットルの良質の水が追加で必要となることが見積もられている。
- 労働
  ブドウ栽培、ワイン醸造の分野で1万500人の雇用が新たに必要。また、観光等、関連業界でも同数字の雇用増加が見積もられている。効率的なワイン生産に向けてより高度な労働能力が求められるため、研修制度を充実することも必要となる。
- 資金
  2025年の目標達成に必要な資金は約50億豪ドル（約4500億円）。資金はワイン関連企業の利益剰余金から約14億豪ドル、個人投資家からの投資資金が8億豪ドル、株式市場から28億豪ドルを調達したいとしている。

ワイン業界にとっては2025年の目標達成に向けて連邦、州政府との協力関係を保ち、今後のブドウ畑拡大のための土地利用、業界の研究費、技術習得に向けた研修制度等の援助を受けることが、成功への一つの鍵となるであろう。政府側としては、ワイン業界の発展により①オーストラリアの輸出の伸びによる経常赤字の縮小、②雇用者数の増加による労働市場の改善、③観光業界の発展による地域の活性化等、が期待できることからワイン業界の目標達成に向けたサポートを行っていく姿勢を示している。

おわりに

僅か200年余りの国の歴史と共に育ってきたオーストラリアのワイン業界は今やオーストラリア経済にとって重要な役割を担っていると言えよう。今後、ワイン業界の発展が加速化していくことは確実視されており経済への貢献度は勿論、国のシンボルとなる産業にまで発展することが期待されている。2025年の目標を達成するには、オーストラリアワインがワイン大国イタリア、フランスに勝とも劣らない程のブランド力を有するようになることが必要であろう。ワイン栽培に適した気候、ヨーロッパ各国からの移民により導入された進んだワイン製造技術を有するオーストラリアは低コストで高品質のプレミアムワインを大量に生産することが可能であり、今後、ワインの需要の伸びが見込まれる日本を始めとするアジア地域、

北アメリカ向けに輸出を伸ばしていくことによりオーストラリアワインの世界的知名度が高まっていくことが期待される。オーストラリアのレストランで見られる光景がアジア地域、北米等でも当たり前の光景となるころ、ワインと言えばフランス、イタリア、オーストラリアと浮かぶ人がどれだけ増えるか楽しみである。

参考文献

- Winegrape and Wine Industry in Australia ／30 June 1995
  (Australian Government Publishing Service)
- Australian Wine and Industry 1995
  (Australian Bureau of Statistics)
- A Concise History of Australian Wine
  (John Beeston)
- An Introduction to Australian Wine
  (James Halliday)
- Strategy 2025 Documents
  (Australian and New Zealand Wine Industry Journal)